無題(仮・第三章)

中根　辰榮

≪前回までのあらすじ≫

週刊誌の記者である赤江良平は、記憶喪失で名前すら忘れてしまった男、山田浩平に関する連載記事を書く事となる。さほど気を入れて立案した企画でなかったが、次第に「記憶を取り戻す」ことを最終目標にした事で、彼のモチベーションはおのずと高まっていった。娘の赤江紅羽は取材内容を盗み聞きしてしまったことで、家でその検討に加わるようになっていった。取材開始から数週間。落ち着いた生活を送っていた山田が、突然発作を引き起こす。偶然にも取材を行う直前で、赤江記者を含めた関係者は騒然とする。なんとか取材は行ったものの、赤江はこの発作⇔フラッシュバックを引き起こした「なにか」を掴めず、話を聞いた娘も同じように悩むこととなった。

※※

例のフラッシュバックを起こしてから、山田さんは数日の安静を求められたらしい。直近の取材は延期となり、私は編集長から新人記者のヘルプにまわるよう命令を受けた。

「あんまり口出ししすぎないでよ。あと威圧的なのも」

ハラスメントを生み出すまいと、幾度も釘を刺された。曲がりなりにも娘を育てる身として、ハラスメントまがいの言葉には前々から注意していたからか、ヘルプの期間にそういう類いの問題はなかった。

むしろ、面白い話が聞けた。

「赤江先輩」

「なに？」

「今先輩の取材ってお休みでしたっけ」

「まあ、ちょっといろいろあってな」

「どうしたんです？」

聞かれて答えないわけにもいかないので、これまでの事情を話した。

「なるほど、取材相手の体調が悪いってことで今はお休みなんですね」

「そうそう。連載記事も一旦止めてもらって」

「再開はいつなんです？」

「来月半ば。十三日」

「少し延ばしただけって感じなんですね。今月ももう終わりですもんね」

「六月も終わるし、早く梅雨も終わってくんないかな」

「ほんとですよね。雨のせいでいろいろニュースも騒がしいですし」

「最近じゃ日本全国で雨。雨。雨だしな」

「私が子供の頃でもここまで降るのは九州とか沖縄が多い、みたいに思ってたんですけどね」

「気候が変わりつつあるらしいよ。日本だけじゃなくて、地球で」

「へえ。先輩ものしりですね」

「まあ聞きかじった程度ではあるけどね」

喫茶店のコーヒーをすすりながら、ふと後輩が言う。

「……そういえば」

「なにさ？」

「この前、海外でなんか事件があったらしいんですよ」

「どうしたよ急に」

「いや、ニュースで俺が最近一番気になってるのがその記事で」

「なるほどね」

「うーん……ニュース記事あったっけかな。あ、そうそう、これですこれ」

携帯を取り出して画面を見せてきた。

「アメリカで行方不明になった教授が見つかったってニュースだったんですよ」

記事は要するにこういうものだった。

現地時間六月七日から行方不明になっていた米国のジョン・カーター教授が所属する大学から遠く離れた日本にて発見された。教授は、二十二日正午頃、東京某所にて雨でびしょ濡れになっているところを保護された。所持品は身分証などと、書き殴りに呻れたメモのみであり、脱水症状と栄養失調であった。現在外務省は教授の身柄をどうするべきか米国大使館と協議している。なお、教授が空港を通過したとされる痕跡がない事から、どのような経緯と手段で来日したか慎重に調査している。しかし、本人は「わからない」とだけ証言しているとの事である。

「なーんか、変わったこともあるもんだな」

「渡航の痕跡がないのがミソですよね」

「単純に記録ミスとかじゃないの」

「まあ最近じゃデジタルですしね。データ飛びなんてありえることですしね」

「あ、でもそれでも日本に来た理由もわかんないな」

「研究に追われすぎての逃避行じゃないですか？たまにあるじゃないですか、仕事投げ出して逃げ出したくなるときとか」

「有休休暇すら与えられない研究者の末路、ねえ」

「最近じゃそういうたぐいの事も少なくないらしいですよ」

そういえば、休みも連載の少し前からまともに無かった気がする。

「先輩も、あんまり根詰めすぎないでくださいね」

「はいはい」

後輩に別れを告げ、改めて手帳を見てみる。七月六日号用の取材の日に、山田さんは発作を起こした。かろうじて行えたものの、状況を考えて連載は七月六日号分を中止。その分は一週間延ばした七月十三日号に回された。現在新しい取材は行えていないが、とりあえず七月に入ってから一度行うこととなる。

「……まあ、ゆっくりと、ね」

※

「私が、御迷惑をお掛けしまして」

「気にしなひでくださひ。何が引金となつてあゝいふこ

とになるかなんて、誰にも解りませんから」
「然し」
「取り敢へず、山田さんは御静養を」
「……はい」
　此の寝台を見ると、少し前の私を思い出す。彷徨い歩いてゐたあの日々。僅か数日ではあつた。が、思い出す。私を苛むひどい飢えと渇き、アスファルトの照返す陽光。尽き果てた躰の倒れこむ感覚。灼けつき、痛み。誰かの駆け寄る音と姿、その微睡。
――ですか……しやをおねが……
　幻影。揺れ動く暗色達。其処から私が始まった。
「山田さん」
声を掛けられていた。
「すみません」
「いいですよ。変に体力を使つたんですから」
「……全く、困りますよね」
「そんな気に止まないで下さい」
「あ、違うんです。何も、かうなつても思い出せないのが、嫌になるな、て」
「さう焦らないで。ほら、よく謂うぢやないですか。急がば回れ、なんて」
「……兵は拙速なるを聞くも、未だ功久なるを睹ざるなり」
「る？」
「要するに、私は、永く引き摺るのが怖い」
怖い。
「けどまた、思い出すのも怖い。不思議なものですね」
其方も、また怖い。
「……」
「あ、すみません。また変な話を」
「お気になさらず。此処に飲み物を置いておきますから、自由に飲んで下さいね」
「だうも」
看護師さんが去つていく。
　なんとパラドクシカルだらうか。だけれど、現実として私には相反する此の二つが共存できてしまつてゐる。何方に向かえば良いのか、その先とは、何なのか。
――安心してください。担当は私しか居ませんから。
ふと、何時かの声が再生される。赤江さんには例の事件以降会つていなかつた。毎週来てもらうことになつていたのに、矢張り申し訳ない。
「今度、何時が取材日だらう」
　前々以上に、会おう話さうと思う気が増してきた。或る本心がだうしても思い出させやうとする。暗色が覆う其の姿。色合の端々を探すが、見渡せども永久に拡がる。
「……水」
　喉が渇いた。水差しに手を伸ばす。空だつた。だうやら園長も医者も気づかなかつたらしひ。寝床から腰を離し、水道を探す。医務室には見当たらず、廊下に出る。
　窓の結露、曇天から降り注ぐ灰。靄や霧と迄は行かない、浮遊する水滴。静寂。右手に三口の水道が空いていた。水差を置き、栓を緩める。
　キュ、キュジャーーーーーー。勢いが良い。透明の実体が満ちていく。腕に其の重みが掛かり、受口がずれないやう気を付ける。誰も居ない廊下に、水音だけが反響を続ける。
「……あの時」
　あの痛みとも、閃光ともとれない衝撃。襲ってきた負の感情。自分でも何処から来ているのかが解らなかった言葉。ミツカルナ、さう言つていた事が思ひ出される。一体何から逃れやうとしていたのか？
「分からない」
……冷やかな感覚が、手から頭の中に伝わつてきた。
「あら山田さん、水」
　意識の向こうから、園長がぬっと出てきた。
「すいません！」
「大丈夫？やつぱり疲れてるのよ」
栓に皺の入つた手が被さり、勢いが止む。
「私持つわよ」
「ありがたうございます」
寝床に戻る。
「さうさう、赤江さんから電話あつたわよ」
「赤江さんから？」
「えゝ、数日経ちましたけどあの後体調は如何ですかつて」
「赤江さんの方は？」
「七月の頭に来ます、て。六月中は休載で良いとのことですよ」
「申し訳ないですね」
「仕方無いですよ。誰が悪い訳でもないですから」
「……でも、あの声は」
「はい？」
「声、声が聞こえて。ミツカルナ、と」
「其れ、赤江さんには」
「未だ。あの時は頭が込み入つてましたから」
「さう。ぢやあ、次に会う時に？」
「そのつもりです。何か、手掛かりになるかも」
「さうね。けど取り敢えずはゆつくり休んで」
「……はい」

「ぢやあ私は戻りますから。赤江さんの電話の件で来ただけだから」
「はい」
にこやかに去つていつた。あの微笑みも、何時かは離れていくのだらうか。孰れは此の施設を出て行くのだらう。あの笑顔も、白い部屋も、擦り切れた畳も見る事は無い。多分、戸籍申請の書類が来た時が、去るべき時なのだらう。だが何も、取り戻していない。本当は、取り戻さなくていいのかもしれない？結局、わからない。

※※

喫煙室は相変わらず狭い。白煙はすぐに消えるのだが、とにかく狭い。煙草はやめろと上司にも部下にも家族にすら脅されている。まあでもやめられるもんじゃない、とはぐらかし続けて十年以上だ。
紺地に金縁になってしまった箱から一本を取り出し、火を点ける。スマホを取り出し、何となしにググる。
「お、いるね」
編集長だった。この連載を通した張本人。
「お疲れ様です」
「その言葉返すわ。大変ね、君の取材も」
「まあ、こういうこともありますよ。思い出すっていうのは、それ位の犠牲が伴うのかも」
「フラッシュバック、だっけか。確かに、何もない状態から嫌なことも含めて思い出すんだからね」
「きついですよね多分。調べてみたんですけど、ああいう記憶障害って嫌な事とか、トラウマが原因であることが多いそうですよ。あ、火使います？」
「ありがと」
赤マル(注一)を取り出したのを見て、火を差し出す。
「どうもね。で、赤江君はどう思うの」
「何がですか？」
「取材してる山田さんだっけ、その人のこと」
「思い出せないのが本当か、とかですか」
「正直そこは疑ってないんだけどさ、ほら、思い出すかもしれないじゃない、取材中に」
「まあたしかに」
「その時は、連載とかどうするの？」
「あー、続けるつもりではありますけどね」
「それが、山田さんに酷でも？」
答えられない。たしかに山田さんは、話すことを自ら望んでいる。けど、本当の「山田さん」が現れても、その保障はあるのか？
「私自身、オッケーだって言っちゃったけどさ、万が一のこともあるでしょ？思い出した先が、余りにも残酷な話だってことも」
「……そん時は、やめますよ。本人が望まないなら」
「でも正直な話、連載の中止はなかなか大変よ」
「まあ、説明責任があるのならそれは果たします」
「気負わないの。私だって選者としての責任があるわ」
「すんません、編集長にも責任取らせるようになっちゃって」
「曲がりなりにも編集長だからね。そこはわかってるつもり」
「……フラッシュバックの件なんですけど、どうやらテレビを観てて起こったらしいんですよ」
「というと」
「発生した日のテレビ、確認してみたんです」
紙に書き付けた番組表を見せた。
チャンネル１：生放送のトーク番組
チャンネル２：健康番組
チャンネル４：ワイドショー(ファッションコーナー)
チャンネル５：ワイドショー(ニュースコーナー)
チャンネル６：ワイドショー(ニュースコーナー)
チャンネル７：グルメ番組(中部地方に関して)
チャンネル８：ワイドショー(ニュースコーナー)
「どう思います。疑わしいのは7チャンネルなんですけど」
「局に録画テープとかもらえた？」
「いやいやいや、私が電話したところで貰えませんって」
「あーわかった、私から電話してみる」
「え、そんなことできるんですか」
「まあねえ。これでも昔はテレビ関係者を文で殴ってたし」
「あれでしたっけ、某サからはじまる新聞でしたっけ」
「そそそ、８チャン支えるあそこね。それに」
「はい？」
「ここまで来て徹底して調べないわけにもいかないでしょ。あんたがやりたがってるの見て、編集長がへたに止めてどうすんのよ」
「ありがとうございます」
サの時代には辣腕奮ってウエと大揉めしたこともあったらしい。
「ちょい」
「なんです？」
「さっきのチャンネル表」

「あ、はい」
殴り書きを渡す。編集長がまじまじと見つめる。
「あっれ、そういえばだけど7チャンもだけど番組の内容が違くない？」
「え？」
「いやさ、あんた取材に行ってて知らなかったかもしれないけど、この少し前に速報流れた気がすんだけど」
赤マルをふかしつつ煙と共に流れ出てきた言葉だった。
「速報ですか」
「そそ。確かねえ……」
おもむろにジャケットのポケットからスマホを出した。少しして操作が止む。
「ほらこれ」
そこには他社のネットニュースが出ていた。

※※※

「行方不明だった教授、独自で会見実施
新世界を見たと大騒ぎ」
五日くらい前の記事だった。
「保護の後、大学はおろか全世界に向けて映画のような言葉を発信する男が現れた。名前はジョン・カーター。米国物理学会の重鎮にして、二十二日に日本で発見された人物である。彼は保護の直後から、私は発信せねばならないあるものを見た、これは世を揺るがすものであると言い続けていたとの事であった。そして日本時間二十九日午後十二時頃(現地時間二十八日午後十〇時頃)、教授はメディア各所に呼びかけ声明を発表した。ＣＮＮによると、会見開始直後から人類の新たな時代の到来は既に近づいていると大言壮語をならべたて、しかるべきのちには私が必ずや全ての人間が一度は夢に見たことの実現をつかみ取ると発表した。記者陣がその内容を具体的に示すよう質問をぶつけたものの、これを先んじて発表することは、ともすれば戦争を招くことになるので言えないと切り捨てた。会見時間終了直前、記者らに向けて私は新世界の一端を見たのであると力強く言い放ち、会見場を後にしたとの事である。これに対し、メディアはあまりにも漠然とした内容に落胆。一部では物理学の権威も認知症には勝てず、という皮肉めいた見出しも踊った。一方、ある界隈では彼の会見後その正体にメスを入れるべきだとする声が多い。それは、オカルト界である。ジョン・カーター氏が物理学の権威であることから、物理学会を揺るがす大発見を出すのではないかと話題になっている。あるサイトの代表者はシュレディンガーの猫(注二)に明確な答えが出たのでは、としている。別の人物からはアインシュタインの考えを応用させたタイムマシンの理論ではとしている。いずれにせよ、一部では本当の大発見を期待する声があるのも事実である。
(佐々木憲夫)」
「……それで取材中に番組の変更があった、ってこと？」
「そういうこと。だからこの前調べた内容が違うかも、ってさ」
「ふり出しに戻っちゃったかあ」
「まあ番組自体は変わらないから、あとはビデオさえもらえればわかると思う」
調べたつもりでいたが、お互いテレビ内容の変更まではつかめていなかった。
「お父さんの連載、いまどうしてんの？」
「休載中。七月半ばの号でまた再開」
「よく止めてもらえたね」
「さすがに取材相手が体調を崩しちゃなあ。俺がどうなったところでも行けって言われるけどな」
「そりゃ雑誌の内容濃くして売り上げ伸ばすのが目的だもんね」
「記者はこき使われるのよ～……」
トホホ顔で水を飲む。
「最近学校どうなんだ」
「なあんも変わんない。部活は雨が多くて屋内ばっか」
「大会とかあったっけ」
「来月終わりにね。言っても私スタメンじゃないけど」
「やっぱりスタメンは夢のまた夢って感じか」
「前から言ってるけど私別に試合とか出たいわけじゃないからなあ。スタメン取ろうがなんだろうが気にしてない」
「しけたやつだなあ。部活って大会出てなんぼなんじゃないの」
「部活入ったのも運動不足になるのが嫌だっただけだよ」
「え、初耳なんだけど」
「今と昔は違うの。大会出るのに汗水垂らすのだけが正しいってわけじゃないんだよ」
「……時代かあ」
「そんな～時代も～あったねと～」
そう、時代。日本史とか世界史で習う以上に今の移り変わりは早いらしい。身をもって感じる、とかそういうのはない。けど、流行りがものすごく早く変わるとは思う。小学生時代の流行は半年ぐらいだった。けど高校に入ってからは一ヶ月でなにかしらが変わってる気がする。みんな平然と話題に持ってくるけど、そういうアップデートを上手くやっていかないと生きていけないみたいだ。
「昔は昔で悪くない気がするけどなあ」

「そりゃ悪い処ばっかりじゃないのはわかるよ」
　かわらないものがあることもまた面白い気がする。歌舞伎とか漆塗りなんかはそうやって歴史と美しさを保ってきた。後継者がいないとどこかしこでも騒いでいるのは、今の流行があまりにも早いせいなのかもしれない。
携帯が鳴った。父のスマホだった。
「あ、もしもし……はい……ええ……あ、そうなんですか、連絡が。……ちょっと待っていただけますか」
マイクを押さえ、書くものと紙を求めてきた。とっさにペン入れから貰い物のボールペンとチラシの裏面を渡す。
「お待たせしました。……ええ、まあそうです……そうです、七月十三日と二十九日です。……まあ、なにもなければそうなりますね……」
連載の件だろうか。
「あ、その確認で……はい、初稿は取材日の翌々日です。……そうです、そういう感じです。……え、まあ、次回の連載に関してはメドが立っていますから。……はい、はい、何卒よろしくお願いします。……ああ、今日の件ですよね。……そうですか。じゃあ明日いただければ。……早いんですね。案外時間がかかるものかと。……いやいや、そういうつもりは。……はい、それでは明日。お疲れ様です」
「どしたの」
「編集長から。記事の連載計画の確認。上の人に救済の件で事情説明したんだけど、合ってるかってさ。あと番組変更の件で、放送時の映像もらえるってさ」
「え、編集長さんすごくない？」
「昔のコネだって。うちの会社来る前はテレビもやってるところに勤めてたからって」
「すごい人だね」
「辣腕奮っていまんとこに来たらしいけどな」
「じゃあお父さんは振り回されっぱなしってわけだ」
「いやいや、俺は俺で動いてるだけだし」
「でもこの企画通したのも編集長の一押しがって、でしょ？」
「まあな」
「じゃあその時点でぶんぶん回されてるようなもんだって。正直企画が通ると思ってなかったって、前言ってたじゃん」
渋い表情で何も言えなくなってしまった。
「まあともかくさ、映像来たら確認しよ」
「まあな……あ、またお前ちょっかい出す気だな」
「もういいじゃん。調べもの手伝っちゃったわけだし、もう踏ん切りつけて私にも手伝わせてよ、調べるの」
「……いやになっちゃうなあ……。わかった。ただし絶対に口外しないこと、約束しろよ」
「前にも言ってたじゃん。わかってるって」
水をまた、ぐいと飲み干す。
「……よし、俺上に上がるわ。ちょっと調べものあるし」
「そ。じゃあ頑張って」
「どうも」
階段を上がる音が響く。私にもやらねばならないことは山ほどある。たとえばそう、明日のテストの準備とか。

※※

喫煙室。またここだ。編集長のお呼び出しはここが相場である。
「ほれ、例のデータ」
「すみません。お手を煩わせて」
「気にしないで」
赤マルを取り出し、火を点ける編集長。
「あたしくらいになるとこれぐらい造作もないのよ」
「かっこいいっすね」
「ま、かっこつけて言うことができるだけよ」
「確認する前に聞いちゃうのは在れなんですけど、内容って変わってました？」
「内容自体は変わらなかったけど、番組構成が結構ずれ込んでて、一部は別日放映になってた。だから当日見てたであろう内容と番組表の内容が合致しないのも当然、って感じかな」
「なるほど」
自分も一吸いする。
「……一つ確認したい」
「はい」
「そのぅ、山田さんだっけ。記憶障害になってる人」
「はい、仮称ではありますけど」
「……本当に記憶障害？」
「え？」
「いやね、私昔少しだけヘルプみたいな感じでテレビ制作の方に関わったことあんのよ。四年前ね」
「はい」
「そん時の番組さ、行方不明者とか記憶喪失者の捜索を行う番組だったのよ」
「ああ、たまにありますね」
　俺がこの企画を編み出してしまった(と言っても差し支えない)原因になったああいう番組のことだ。
「その時にね、ひとりの男の人が記憶喪失者として登場したんだよね。けど後々調べてみてびっくりしたの」
「なにかあったんですか？」

「記憶喪失なんて真っ赤な嘘。本当は不法な長期滞在をする隠れ蓑にしてた外人だった、ってのよ」
「え、そんな悪用ができるんですか」
「できちゃうんだなこれが。うまくいけば新しい戸籍を得て晴れて永住」
「なんでわかったんですか」
「ネット」
「え」
「ネットでその人が番組に登場した後からいろいろと探った人たちがいたのよ。そしたらものすごく似た人が従業員として映った写真が見つかったの」
「それで」
「警察沙汰にまでなった。結局お金がないし就労ビザの有効期限も切れかかって、身をくらまして記憶喪失者のふりをしはじめたってわけだったの」
「……山田さんもその可能性がないわけではない、と」
「疑いたくはないけど、私の経験としてこういうことがあったのだけは伝えておかないとって思ったのよ」
「まあ、記憶喪失の認定は難しいところがありますしね」
「あんたも、少しは疑ってかかることも大事だってのを忘れないでよ。記者としてさ」
「フェイクニュースの問題ですよね」
「いまじゃ記者すら騙されて、へたすりゃ誇張なんかを含めて偽情報流そうっていう魂胆の人間だっていないわけじゃない。うちの目が黒いうちにここの部署からそういった記者を出したくないのよ」
「……俺は、大丈夫です」
「そう言ってる方がむしろ怖い」
言い返す言葉も無い。ここまで二回とはいえ連載で彼を取り扱ってきた。もし、これが嘘で作られた砂上の楼閣であったとしたら。
「ま、疑りすぎるのも相手に失礼ではあるけどね。じゃ、取材と連載頑張って」
赤マルを捨て、颯爽と去っていった。俺の指先が、熱い。灰がボロボロと落ちていた。
「……疑うことも、また仕事か」
かろうじて残った一吸いを口元にやった。妙に辛かった。

※

「本？」
「えゝ、何でも良いので本を読みたいのですが」
「わかりました。ぢやあ来週中には用意しますから」
「あ、あの」
「はい？」
「今読める本は、何か在りますか」
「今すぐに？」
「えゝ」
「……あ、ある」
「本当ですか」
「一寸変わってるかもしれないけど、此れなんて如何かしら」
園長の手元には、鮮やかな装丁の本があつた。
「此れね、私が少し前迄読んでゐた奴なんだけど、折角だからどうかな？」
「有難う御座います」
「日本も含めて海外の自然に関するエッセイ集みたいな本だから、読み易いと思うわよ」
「ぢやあ御言葉に甘えて」
「読んだ後に返しに来てね」
「はい。すみません園長」
「気にしなひで。復た何かあつたらいつでもだうぞ」
「はい。失礼します」
無機質な廊下を渡る。手元の鮮やかさが壁面に、天井に反射する。
「さてと」
自室へとたどり着いた。早速読むことにした。
挿図が鮮やかである。単なる植物の緑や海や川の青だけではない、もつと深くて清かな色合いが目に飛び込んでくる。
それは、国内外の自然に纏わるエッセイ集だつた。書き手は国内での評価が高い一流作家。文字からも情景のありありとした様が浮かんでくる。
「……？」
ふと、一節が引っかかった。
――……の緑というものは、逞しさを感じずにはいられなひ。亜熱帯を生きる自然を見ると、嘗て気候と風土の繋がりを考えた哲学者の名前が自ずと浮かんでくるのである。此処に生きる生物も復た豊かさを感じずにはいられない。人々は自然に生き、生物達も同様に鮮やかさと我々が忘れた本能的な心を擽るのである。
写真に目を遣ることが、出来なひ。体中に此の文面から浮かんでくる包み込むような湿気と温度が、吐き気にまで繋がる。わなわなと体の震えが込み上げる。
――ハイレ！ヤツラダ！
――チクショウ、マウココマデ
あの声だ。違う声だ。何処かに身を潜めねば……。
――バカヤラウ！

怒号！バリバリと何かの音迄聞こえてくる。衣裳棚に身を潜める。声が、遠のかなひ。音が交錯する。声はなくなった。音が近づき、上面を通過しようとする。……止まった。また別の音！それは刹那鳴り響き、再び前の音が遠のく。

脂汗が止まなひ。身体が緊張で謂ふ事を聞かなひ。手元に目をやる。

「……！」

自分でも覚えがない。だが、その両手は明らかにかう示していた。

奴らを、此の手で殺さねば。

注１：煙草銘柄である「マールボロ」の俗称。オリジナルのマールボロは白地に赤のＭをもじったマークが目印。ちなみに「マールボロ・ゴールド」シリーズは「金マル」、「マールボロ・メンソール」は「緑マル」などと呼ばれる。ちなみに各シリーズごとにタールとニコチンの値が小さいほどＭをもじったマークが小さくなっている。

注２：１９３５年に発表された量子力学的記述の不完全性を示すための思考実験。以下、ウィキペディアからの引用。

猫と放射性元素のある密閉した鋼鉄の箱の中で、放射性元素の1時間あたりの原子崩壊確率を50％とし、ガイガー計数管が原子崩壊を検知すると電気的に猫が殺される仕掛けにすると、1時間経過時点における原子の状態を表す関数は

／原子の状態／＝／放射線を放出した／＋／放射線を放出していない／

という二つの状態の50％ずつの重ね合わせによって表される。その結果、猫の生死は、

／箱の中の状態／＝／（放射線が放出されたので）猫が死んでいる／＋／（放射線が放出されていないので）猫は生きている／

という50％ずつの重ね合わせの状態になる。つまり、箱の中では、箱を開けてそれを確認するまで、猫が死んでいる状態と生きている状態の重ね合わせになる。これは量子力学的には全くおかしいことではなく、観測による波束の収縮の結果が相互に排他的で両立し得ない性質を持つ２つの状態の間の選択になっているだけである。もしもこれが現実を記述しているとすれば、「巨視的な観測をする場合には、明確に区別して認識される巨視的な系の諸状態は、観測がされていてもいなくても区別される」という“状態見分けの原理”と矛盾する。

要するに「量子力学的には、猫は条件下で死んでもいて、生きてもいる。しかし現実的にはどちらかに区別されるべきである」という矛盾を示したものである。回答についてはいくつか提示されてはいるものの、あくまで理論や解釈であり、明確なものは示されていないと言える。